

天瀬裕康著『ジユノー記念祭』

著者は、これまで長年にわたって小説、エッセイ、脚本、俳句など多方面のジャンルにおいて、精力的に執筆活動を続けてこられた。今回、それらの中の大きなテーマの一つマルセル・ジユノー博士に関する、ジユノー記念祭を中心に、その足跡など、これまでのルポやエッセイなどをもとに、一冊にまとめ出版された。

ジユノー博士は終戦の年九月、原爆投下により廃墟と化した広島に一五トンの医薬品を持ち込み、自ら治療にもあたったイスス人の外科医である。ジユノー記念祭とは、博士の徳を称え一九九〇年、博士の命日のある六月に初めて、平和記念公園内にあるジユノー博士顕彰碑の前で行われた式典で毎年開催されている。天瀬先生は、ジユノー記念祭の開催、継続などジユノー博士顕彰事業に多くの

方々とともに早くから深く、熱心にかかわつてこられ、ジユノー研究の第一人となつておられる。私自身はこれまでジユノー記念祭には出席したことなく、またさまざまのジユノー博士顕彰事業にも

ヒロシマ救済の恩人顕彰
核廃絶への願いも込めて
評 江川政招



特に参加する機会はなかつたが、今回この本を読ませていただき、天瀬先生を始めさまざまな分野の多くの方々が、ジユノー博士顕彰事業に携わつてこられたこ

とを知り本当に感動を覚えた次第です。

さて、この本を読み終わつて思つたことは、ジユノー顕彰碑の建立、ジユノー記念祭など、ジユノー博士の顕彰事業にこれほどまでに広く、深くかかわつた人々

の心を動かしたものは何であつたのだろうか。私には次のようなことが感じられた。一つはジユノー博士の実践した敵味方の区別ない赤十字の博愛の精神、二つ目はノーモアヒロシマという言葉に象徴される核戦争防止の願い、そして三つ目は「広島の恩人」としてジユノー博士への恩や徳を忘れてはいけないという思いである。事業にかかわつた人々の思いは、それぞれ少しずつ違つていたかもしれない。しかし、これら三つの思い、願いはともに大きな大事な願いである。

多くの方々の努力により、このジユノー博士顕彰事業が続いてきたことに感謝しつつ、これからも継承されていくことを切に願うものである。